

「函館観光と映画」

代表取締役 岩塚晃一

2009年9月、株式会社ブランド総合研究所が発表した「全国で最も魅力的な市町村はどこ？」アンケートで函館市が第1位となったニュースは、私たちに大きな驚きと喜びをもたらしました。

それだけ函館には、他地区に無い魅力＝「宝物」がたくさん存在している、ということなのでしょう。

函館山からの夜景、グルメ、異国情緒な街並みや建造物、ベイエリア、温泉、五稜郭をはじめ幕末の歴史などなど、恵まれた観光資源が確かに豊富です。

一方、函館への観光客の入り込み数は、年々減少しており、新たな魅力作りが急がれます。

しかし良いニュースとしても、インターネット上での「イカール星人」のヒット、JRA函館競馬場のリニューアルオープン、五稜郭奉行所復元オープン、青森新幹線開業、さらに函館新幹線開業などの予定があり、こちらも他地区からは羨ましがられるような話題が、幾つも見つかります。

このような函館観光を取巻く環境の中で、私は、それらの魅力にプラスして「映画」という要素を加えたいと考えています。

勿論、これは「函館港イルミネーション映画祭」や「はこだてフィルムコミッション」の設立など、すでに行われてきたテーマであり、市の観光パンフレット「浪漫函館」にも、見開きで「映画の紹介」ページもあるわけですが、函館・道南を舞台にしたとされる映画は70本を越えており、著名な森田芳光監督にも、「函館は街全体がオープンセットだ」と称されるのですから、それだけ函館の「異国情緒な街並み」や「海や港、ベイエリアの風景」や「路面電車」などが、他に無い魅力となっていることは間違いありません。

ですから、映画という視点は今一度、注目するべきだと思います。

また、北海道全体で観光客が減少している中、増加した成功事例となっている地域といえば、中国で記録的なヒットとなった映画『非誠勿擾(フェイ・チェン・ウー・ラオ)』の舞台、道東・オホーツクだったり、倉本聰脚本のテレビドラマ『風のガーデン』の舞台、富良野であったりするわけで、近年、観光客が増加している地域は、実は映画やテレビドラマの舞台であるわけです。

(テレビドラマについても、函館はよく取り上げられていますが、「殺人事件」など暗いテーマが多いのが気になります。クリスマスファンタジーや元町・ベイエリアを舞台にした恋愛ドラマ、 트렌디・ドラマなど、若い人向けも似合うのになあ、と思っていますが、ここでは映画についてのみ述べます。)

以上のような理由から、函館観光に「映画」という魅力を一つ、さらに強化すべきだと思います。これは時間を掛けてでも、遅かれ早かれ、函館にとって必要なことだと思います。

さて、それではいったい、函館・道南を舞台にした映画には、どのような作品があるのかをみてみましょう。

私はこれまで、映画館の他、レンタル屋や中央図書館、さらにはインターネットでビデオやDVDを取り寄せて、なんとか次の33作品を観ました。

『蟹工船』(1953) 『ギターを持った渡り鳥』(1959) 『赤いハンカチ』(1964) 『飢餓海峡』(1964) 『夕陽の丘』(1964) 『続・網走番外地』(1965) 『家族』(1970) 『男はつらいよ 寅次郎相合い傘』(1975) 『海峡』(1982) 『居酒屋兆治』(1983) 『ときめきに死す』(1984) 『雪の断章・・・情熱』(1985) 『キャバレー』(1986) 『新・喜びも悲しみも幾歳月』(1986) 『キッチン』(1989) 『いつかキラキラする日』(1992) 『オートバイ少女』(1994) 『霧の子午線』(1995) 『三毛猫ホームズの推理』(1996) 『キリコの風景』(1997) 『風の歌が聴きたい』(1997) 『愛を乞う人』(1998) 『港のロキシー』(1999) 『ほとけ』(2001) 『パコダテ人』(2001) 『オー・ド・ヴィ』(2001) 『星に願いを。』(2002) 『海猫』(2004) 『日本沈没』(2006) 『l i t t l e D J ~小さな恋の物語』(2007) 『犬と私の10の約束』(2008) 『引き出しの中のラブレター』(2009) 『わたし出すわ』(2009)

これらの作品の中には、函館の街並みがほとんど出てこなかったり、映画自体が面白くなかったり(失礼) 血生臭いものであったり、テーマが暗かったり、いろいろですが、「函館観光の魅力アップにつなげられる映画」としては、私は次の13本がおススメだと考えています。

一、『ギターを持った渡り鳥』(1959) ~ 小林旭、浅丘ルリ子主演。渡り鳥シリーズの第一作目。旧公会堂や二階からの眺め、七財橋、50年前の倉庫群、函館山山頂からの函館港、舗装されていない護国神社坂、巨大な青函連絡船など、昭和30年代の函館の街並みが見られる貴重品です。

二、『夕陽の丘』(1964) ~ こちらは石原裕次郎、浅丘ルリ子主演。やはり昭和30年代の函館を存分に見られます。特出すべきは、赤い屋根の元町教会！これは昔の観光ポスターにもありますが、やはり素敵です。その他、当時の函館駅や空港、棒二デパート(各階の店内や屋上の遊園地！そこからの市内の眺めも見られます)も観ることができる、こちらも歴史的価値のある作品です。

三、『新・喜びも悲しみも幾歳月』(1986) ~ 原作・脚本・監督は木下恵介。加藤剛、大原麗子、植木等ら出演。転勤の多い灯台仕事の一家を追いながら、日本各地を紹介するロケ映画。ストーリーは、平凡な日常にある家族の幸福を描く、良質ドラマです。函館も短いですが登場し、元町の教会など魅力ある、異国情緒な港町として描かれます。「俺ら岬の灯台守は・・・」で始まる同名の歌が有名なんですね。

四、『キッチン』(1989)～森田芳光監督の記念すべき函館ロケ第一作。主演女優は27000人の中からオーディションで選ばれた川原亜矢子、十八歳。現在の女優、有名モデルの映画デビュー作です。この映画で描く函館は、「架空の街」としての設定ですが、夜、緑と青にライトアップされた街並みや市電、元町公園など、なんともロマンティックで素敵です。撮影が大変だったそうですね。

五、『いつかキラキラする日』(1992)～アクション映画の巨匠、深作欣二監督作品、萩原健一主演。『仁義なき戦い』や『バトル・ロワイアル』の深作監督らしい血生臭い映画ですが、しかし後にも先にも、これほどベイエリアで大暴れするカーアクションは、二度と撮ることは不可能でしょう！ハリウッド映画並みの迫力で、この作品は、個人的に落とせません。ある意味、イカール星人が函館で暴れまくる原点が、ここに 있습니다。

六、『キリコの風景』(1997)～杉本啓太、小林聡美主演、森田芳光脚本。日常をちょっと不思議な角度から描き、音楽も異様な雰囲気盛り上げる異色作です。私は、この映画全体の独特な雰囲気が気に入り、やはり落とせない作品です。スナックのママを演じる小林ですが、懐かしい「りき車」も登場します。青年会議所メンバーも登場してたりします。また、当別のトラピスト修道院も素敵に描かれています。

七、『パコダテ人』(2001)～NHK大河ドラマ『篤姫』で大ブレイクした、宮崎あおいが十六歳の時の主演映画。これこそ函館のPR映画です！ある日、尻尾が生えてしまった彼女は、はじめは落ち込んでいましたが、家族に励まされ、それをテレビで「パコダテ人」として公表したところ、函館が世界中から注目され、観光客が押し寄せてくるというストーリー。函館中が「函」の右上に を付けて「パコダテ」、観光客は皆、尻尾ファッションで大はしゃぎ。函館の街で展開するエンターテインメントは最高に楽しいです！後半は『E・T』的ストーリーで感動的。全編、かわいらしい秀作です。

八、『星に願いを。』(2002)～吉沢悠と、感動ものではピカイチの竹内結子主演作品。旧ロシア領事館、遺愛中高校、カフェテリア・モーリエ、緑の島、市電車庫(駒場町)、巴大橋などが舞台となり、感動の物語が展開します。素晴らしい作品です。吉沢扮する「天見笙吾」のハーモニカの音色が、いつまでも余韻として残ります。

九、『海猫』(2004)～森田芳光監督、出演は伊東美咲、佐藤浩市、仲村トオルという豪華陣。南茅部の風景は綺麗ですが、人間関係はドロドロです。伊東と仲村が訪れる、元町のハリストス正教会のシーンが美しい、絶品です。

十、『Little DJ～小さな恋の物語』(2007)～天才子役、神木隆之介と福田麻由子主演。切なくて、いい映画です。音楽も素晴らしく、耳に残ります。南茅部病院、八幡坂

が登場し、函館山麓ではCGで再現された1970年代のロープウェイが登場し、必見です。函館山砲台跡が、主人公二人の雨宿り場所になります。

十一、『犬と私の10の約束』(2008)～田中麗奈、豊川悦司、高島礼子ら出演。作者不詳の英文の短編詩「犬の十戒」。インターネットで発表されると、犬を飼う多くの人の共感呼び、世界中に広まったといえます。この詩から本作が誕生しました。主人公のソックスが晩年を迎えるラストは、言葉になりません。

十二、『引き出しの中のラブレター』(2009)～常盤貴子、仲代達也、八千草薫ら出演。人の気持ちに染み入る、癒しと温かさの映画です。見終わって温かな気持ちにもなります。大都会東京と、地方の町函館とを交互に描き、函館は人情豊かで、都会の慌ただしさが無い、「癒しの町」のイメージで、東京と対照的に描かれます。「Little DJ」と共通するテーマ、「ラジオを通じた人間ドラマ」です。

十三、『わたし出すわ』(2009)～森田芳光監督の力作、小雪主演。本作の根幹に流れるテーマは、非常に深刻です。「お金が人間を、いかに狂わすか」。人はお金によって、人間性も損なわれたり、人生の方向も曲げられたり、命そのものも深刻な影響を受ける様子が描かれます。日常を描きながら、お金の恐ろしさというテーマが、根底にあります。幸か不幸か、その舞台として函館が選ばれました。函館山からの夜景が登場する以外は、どの地方の町にもある風景がほとんどで、異国情緒な街並みは登場しません。(おそらく魅力的な街並みは主題から逸れるので、そうしたと思います。)話の展開や会話が、相当、深く練られたようで深みがあり、DVDが出たら何回も観たい作品です。

以上の13作品を中心にして、今後、観光振興のために、映画が活用できないかと考えてみます。現在は、最新作の封切りに合わせたプロモーションがほとんどで、上述したような過去の作品は、お蔵入りしていて、非常に勿体無い気がします。確かに著作権などの問題が常にあると思いますが、過去の作品も、今後、何らかの形で観光振興に役立たせたいものです。現在のところ、思いつく案は、下記のようなことです。

函館市が、近年は「ロケ地マップ」チラシを作成してくれていますので、これを元にタクシーやバスのモデルコースを作成して、観光客にもPRする。

市内の各地に『函館ロケ映画』コーナーを設け、ポスターや原作など関連するものを飾る。ロケされた場所で、観光客が記念写真を撮って楽しめるように、説明看板などを設置する。函館は幕末など、歴史に関する碑が豊富にあり、観光客が記念写真を撮ってゆきます。この映画版があれば、観光客の楽しみが増えます。この予算は、「観光振興」や「地域資源活用」「まちめぐりナビ」といった様々な補助金や交付金を活用して、出来れば一番良いと思います。

街中のいたるところで、函館ロケ映画が流れていけばいいのになあ、と思うのですが、著

作権の制限があるでしょうから、例えば、DVDやビデオが販売されている作品は、それらの販売を兼ねるということで、「予告編」放映の権利を獲得し、市内各地で予告編を流す、ということが出来ないものか、と思います。

また、ある方がお話しされていたことは、市内ホテルなどで有線テレビで、函館ロケ作品を特集で流してはいかがか、というもので、これには私も大賛成です。

以上、取り留めの無いお話しをさせていただきましたが、私としては、こうしたことを今後も考えたいと思いますし、自分でも出来ることは始めたいと思っています。

さらに、まだ観ていなかった作品の中で、『世界はときどき美しい』『東京大学物語 函館向陽高校編』『テイク・イット・イージー』『俺とあいつの物語』『黄金の犬』『竹山ひとり旅』『やさぐれ刑事』『大脱獄』『あの橋の畔で 完結篇』『点と線』の10本は、現在、ネットオークションで入手できたところなので、これから観るのが楽しみです。

それから「函館港イルミネーション映画祭」で、『若い人』と『つむじ風食堂の夜』が観られることも、とても楽しみです。

幾つもの魅力を持つ函館観光に、映画という要素をより強化することで、さらに魅力が増えることを願ってやみません。